

## 翻訳業という仕事 (2019 年城北会千葉支部総会講演)

村井章子(S48)



### 司会 (後藤公一)より村井章子さんの紹介

村井章子さんは 1972 年(S48)に戸山高校を卒業後、上智大学文学部入学し仏文学を専攻されました。1977 年に大学卒業後、三井物産に入社し輸送機械部でアフリカ向け鉄道車両輸出業務のアシスタントを経験されました。1985 年にフリーランスの翻訳者として独立され現在に至ります。二男一女のお子様がいっぱいます。

高校時代、村井さんは室内管弦学班に所属しチェロを演奏されました。私は2年下の後輩に当たります。今日は村井さんの1年先輩でオーボエをされていた勝見さんにも出席いただいています。

村井さんの主な翻訳書は「リーン・イン」、「良き社会のための経済学」(日本経済新聞出版)、「ファスト&スロー」(早川書房)、「資本主義と自由」、「道徳感情論」、「大暴落」(日経 BP) など多数あります。訳書のタイトル数は、約 70 ですが、印刷部数で 10 万部を超えたのが「リーン・イン」と「ファスト&スロー」です。3 万部を超えたのが、「資本主義と自由」、「帳簿の世界史」、「トマ・ピケティの新資本論」、「大暴落」、「イスラム国:テロリストが国家をつくる時」、「悪いヤツほど出世する」です。「良き社会のための経済学」(日経新聞出版社)は日経 2018 年「エコノミストが選ぶ経済図書ベスト 10」第 1 位、「国家は破綻する—金融危機の 800 年」(日経 BP)は東洋経済 2011 年夏のベスト経済

書1位に選ばれています。

### 村井章子さんによる講演

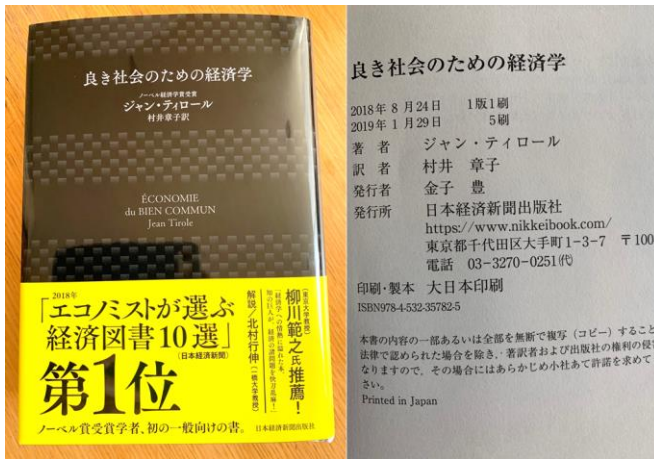
ご紹介いただきました村井です。仕事柄なかなかこのような新しい出会いがなく、今日は楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願いします。

今日は翻訳とは何か、翻訳者はどのように仕事をしているのかについてお話したいと思います。ここ数カ月の間に翻訳書を読まれた方はいらっしゃいますか。(大勢が挙手)

ではその本の翻訳者を覚えている方はいらっしゃいますか。(一人挙手)

これはとても意外でした。私の翻訳ではないですが嬉しいです。でもほとんどの方は覚えていないですね。村上春樹さんが「グレート・ギャツビー」を翻訳するとか、美智子上皇后さまがまどみちおさんの作品を英訳するといったように、翻訳をした人が有名人の場合しか覚えていないのが普通です。

「良き社会のための経済学」の表紙を見ると、著者の名前は堂々と書かれています。私の名前はこんなに小さい。でもこの日本語著作物の著作権者は私なのです。奥付では対等な大きさになっていますが、表紙では小さくて、たぶん訳者の名前がなくてもほとんどの人は違和感を抱かないでしょう。



## 経済学の翻訳者になったきっかけ

こうした地味な職業に就いた理由は、子供の時から文章を書くのが大好きだったからです。作文や読書感想文の宿題が出ると喜ぶ迷惑なタイプでした。小説家になりたいと思ったこともありましたが、小説家は気持ちがアドベンチャーな人でないと大恋愛や不倫をしないし、書けないです。私はあまりにも石橋を叩いて渡らないタイプで、まあ単にもてないという言い方もできますが、小説家の方面はまったくだめだと諦めて普通に会社に就職しました。

就職した商社ではアフリカ向けの鉄道車両を輸出する部署にいて、そこで翻訳の仕事に出会いました。鉄道車両の納入先はほとんど政府なので、国際入札が行われます。先方からは入札書類、スペック、レターなどが来て、こちらからは応札書類を出し、落札して契約に至ると契約書が来るという具合に、膨大な量の書類が行き交います。とても社内では処理できないので外注するわけですが、私は発注する立場として初めてビジネス翻訳の仕事があることを知りました。小説や詩の翻訳の存在は知っていましたが、この時ビジネス系の翻訳は面白そうだったんですね。自分にはこうした無味乾燥な翻訳が合っていると思い、商社を辞めてフリーランスの翻訳家になりました。初めはビジネス翻訳からスタートし、エージェントに登録して主に企業からの依頼を受けていました。

最初はフランス語が主で、ルノーやシトロエンなど自動車関係の翻訳をしていました。自動車の場合フラ

ンス語よりも英語の方が需要は大きいですし、仕事も楽です。英語なら、エンジン、トランスミッションなど外来語としてそのまま使えるものが多いですが、フランス語はそうではないので。仕事の需要とスピードから段々英語の翻訳の仕事が増えていきました。

そのうち自動車メーカーの財務報告の翻訳といった経済に近い内容が増えてきました。そんな中、たまたまダイヤモンド社のハーバード・ビジネス・レビューという経営学関連の雑誌の仕事をしたことがきっかけで、ダイヤモンド社から本の翻訳の声をかけていただきました。ビジネス翻訳の仕事は大好きで不満はなかったのですが、本の翻訳を始めてからそちらにどっぷりはまってしまい、現在に至っています。

文学部で仏文学専攻だったのに経済書の翻訳をするようになったのは、商社にいて契約書や財務諸表に親しんでいたことが大きいですね。父や同級生など周りに経済学部出身の人が多く、いろいろ教えてもらえたことも幸いしました。翻訳業界は女性が多いですが、経済は嫌いという人が多いのです。一度経済学の本を引き受けたら、もっと別のものもやりたと思って、経済書ばかり来るようになってしまいました。女性翻訳者に人気があるのは心理学系で、自己啓発の類、経済学に近いものでは経営学ですね。私が始める5、6年前までは、経済学の本は大学の先生が翻訳するものと決まっていた。今でも、学術書はそうだと思います。ですが、大学の先生は忙しいので翻訳にもものすごく時間がかかります。プロの翻訳者なら3カ月程度で訳すものを10年かかるということもあったそうです。また経済学の先生は普段非常に難解な論文を読みなれているので、翻訳する日本語も一般の読者にとっては難しく読みづらくなりがちです。そのため最近、一般向けの経済書はプロの翻訳者が翻訳するのがむしろ主流になってきています。

私などがノーベル経済学賞を受賞するような学者の本を翻訳していると言うと、「専門用語が難しくて大変でしょう」とよく言われますが、意外にそのようなことはありません。経済学は古い学問なので専門の辞書がたくさんありますし、インターネット上ではさまざまな

研究所や WSJ、FT といった経済専門紙などの情報を検索できるほか、論文もアップされているので、むしろ専門的なことは調べがつきやすいのです。

文学は作者の頭の中ですべて完結しているため、翻訳の手掛かりは文法と作者自身が過去に書いた作品くらいしかありません。ですから、翻訳はとても大変だと思います。経済学の場合は事実を調べて照合することができます。それに、経済学は論理立てて考えられている学問です。従って、前のページの主張と違う主張を次のページでしていたら、それは誤訳をしているということになります。論理で追い詰めていくことができるので、翻訳の対象としてはとてもよい分野を選んだと考えています。

翻訳で難しいのは、専門用語よりも、著者の考えを理解することです。専門家が何年も研究してようやく解明できたことを本に書いているわけですから、素人の私が簡単に理解できるはずがない。でもわからせようと思って書いているのだから必ずわかる、と言葉の力を信じています。もちろん専門家ではないのでわからないことがたくさんあり、片端から調べます。それがわかりやすい翻訳につながると考えています。

あと難しいのは、日本語にない概念を表す言葉、たとえば *commitment*, *engagement*, *implication* などですね。こういう間口の広い言葉は困ります。意外に思われるかもしれませんが *it*, *they* など指示代名詞が何を指しているのかも難題です。関係代名詞の先行詞がわからないことも案外多いです。かつてアダム・スミスの時代には、代名詞や関係代名詞の使い方が厳格でしたから、同じパラグラフの中の *he* は全部同じ人物を指していました。こういう英語は格調が高いと言われていますが、昨今の英語は行が変わっただけで先行詞が変わるので困ります。このように、辞書では解決できない問題で悩むことが多いですね。

### 思い出に残る翻訳

ではここで、私の訳した本を紹介しながら翻訳業のあれこれをお話ししましょう。いろいろなベスト3を選んできました。

まず、やりがいのあったベスト3ですが、これは本自体に価値があった、訳していて勉強になった、また思い出に残ったものです。



フリードマンの『資本主義と自由』は、古い翻訳があまりに難解で長らく絶版になっていました。フリードマンの代表作にもかかわらず翻訳がないという状況に、編集の方が使命感に燃えて新訳を出す決意されたのです。これが日経 BP クラシックス・シリーズの第1作ですが、本格的な経済書の翻訳は私にとって初めてで、苦勞しただけに思い出に残っています。試験問題にも採用されました。破綻のない明確な文章でないと選ばれないわけですから、大変うれしいことでした。試験問題や教科書の場合は著作権使用料が発生しないのですが、過去問集に載れば発生します。学習参考書の出版社から突然連絡が来て驚きました。大学の小論文の題材として一節が使われたようです。以来毎年 2000 円位の著作権使用料が入るようになりました。他にも何冊か試験問題に選んでいただき、親の知らないところで稼いでくれる孝行息子のようだなと感じています(笑)。

『道徳感情論』は『国富論』に並ぶアダム・スミスの代表作です。この本のように著作権が切れているものは、誰でも自由に翻訳できます。アダム・スミスはユーモアのセンスがある良き英国紳士で、翻訳は楽しかったです。出版社からは急がなくてよいので確実なものと言われ、ゆっくり進めていたら、なんと他社に先を越されてしまいました。とてもショックでしたし、出版社には大変申し訳ないことで、もっと急げばよかったと悔やまれます。著作権が切れると、たとえば『星の王子様』や『宝島』などのように新訳がどっと出てくることは

ありますが、まさかこの本を他の方が翻訳しているとは思わず、油断がありました。

ノーベル経済学賞を受賞したティロールの『良き社会のための経済学』は日経 2018 年「エコノミストが選ぶ経済図書ベスト 10」の第 1 位に選ばれました。フランス語からの翻訳だったことも印象に残っています。ティロールさんが来日された時にはお会いすることができました。

ちなみに日本は翻訳大国で、世界のほとんどの古典が翻訳されています。日本は原語主義をとっていますので、たとえばギリシャ文学の場合はギリシャ語から翻訳します。英語に翻訳されたものはいくらでもあります。原語がギリシャ語なのに英訳から訳すのは、重訳といって嫌われます。古い翻訳書の中には漢文調で書かれていたり、「イギリス」が「英吉利」と書かれていたり、賞味期限切れのものが多くなっています。赤毛のアンの中に「継ぎ物」というのが出てきますが、これは今では「パッチワーク」ですね。こうしたわけで、このところ出版業界では古典の翻訳を見直して新訳で出すということが増えてきています。これはとてもいいことじゃないでしょうか。私自身も積極的に古典の翻訳をしていきたいと思っています。

次は翻訳が楽しかったベスト 3 です。中身がおもしろいのはもちろんですが、著者に魅力があったり、主人公に魅力があったり、というものが多いですね。



『ファスト&スロー』のカーネマンもノーベル経済学賞受賞者です。この方は、翻訳していて、とてもよい方だなあと感じました。共同研究者が先に亡くなって

しまったのですが、存命であれば一緒に受賞したはずのその方の思い出や功績が端々に出てきます。また楽しいのは、クイズ形式で書かれていることです。この本のクイズをひとつ紹介しますね。「バットとボールは合わせて 1 ドル 10 セント、バットはボールよりも 1 ドル高い、ではボールはいくらでしょう？」

ハイ、答えは「5 セント」です。ハーバードやスタンフォードの学生たちの半分が間違えたといわれていますが、私も堂々「10 セント」と答えました(笑)。このようなクイズがたくさん載っています。

『コンテナ物語』は主人公がホリエモンのような人で、新しいアイデアが次々と湧き出てきて止まらない。波乱万丈の人生を送ります。

翻訳業界では戦争・軍事ものには気をつけろと言われていています。読者の中に詳しいオタクのような人がいて、いろいろと鋭い指摘をされるからです。『コンテナ物語』を訳して、海運業も要注意だとわかりました。元海の男といった方から、「こういう本が出るのを待っていました。しかしここは違います」という暖かいお手紙を何通も頂戴しました。コンテナの番号の違いまで教えてくださった方もいらっしゃいました。

フランスの哲学者アランの『幸福論』は私が翻訳した唯一の文芸書です。幸福に関する 100 ほどの短いお話を日経ビジネス・オンラインで毎日公開し、反響が大きかったので本にさせていただくことができました。『幸福論』はとても人気のある本で、すでに 10 種類以上の翻訳があるため、何かちがいを出そうと、装幀家の方が一話ごとにすばらしいイラストを入れる構成にしてくださいました。本全体はサーファーが海岸に持っていくというイメージでデザインしたということです。なお、日経ビジネス・オンラインには今でも掲載されていて、冒頭と最後に私の解説も付いているので、よろしければご覧になってください。

最後に大変だったもの、その割にたいして売れなかったものベスト 3、というかワースト 3 です。どれも立派な内容なのですが、著者に共通するのは考え方がひねくれていると言いますか、皮肉なのか本音なのか

わからないところが多くて七転八倒しました。

『有閑階級の理論』にはガルブレイスがすばらしい序文を書いています。それで、書評では序文は読み応えがあると評価していただきました(笑)。

『善と悪の経済学』の著者はチェコの学者で、来日して NHK にも登場し、この本についてとてもわかりやすく解説したおかげですこし売れました。ですが翻訳者としては、どうして本ももっとわかりやすく書いてくれなかったのかしらと、ちょっと腹立たしかったです。

『マイクロ動機とマクロ行動』はノーベル経済学賞を受賞したトーマス・シェリングの著作で、中身はすごくおもしろいのですが、たくさんのグラフが出てくるのにあまり説明がないのです。私の頭ではとんと理解できず、数学と経済学が得意な高校の同級生に頼み込んで教えてもらいました。この時は、高校のつながりは大事だなとつくづく感じました。

このように苦勞の報われない本も多々ありますが、翻訳の仕事がいやだとか、やめたいと思ったことはありません。翻訳で楽しいのは、著者の考えを理解できたときですね。そもそも翻訳の難しいところは、自分では思いもつかないこと、考えられないことを訳さなければならないことです。それを言葉の力だけで理解する、ここに難しさと面白さがあります。難解な英語をしっかり読み解いて自然な日本語にできた時は、「やった！」という感じでほんとうにうれしいですね。なので、難しい本を訳すのは嫌いではないです。こんなわけで、翻訳を天職だと思って飽きずに続けてきました。

## 翻訳業あれこれ

先ほどお話ししましたように、私は最初ビジネス翻訳をしていて、今は出版翻訳中心に、日経新聞の経済教室などビジネス翻訳も並行してお引き受けしています。

翻訳には大きく分けて三つの分野があります。一つ目はビジネス翻訳です。実務翻訳とも言います。これはみなさん毎日のようにいろいろなところで目にしています。自動車、時計などのマニュアルもそうですし、パソコンを起動するといろいろ日本語で表示されるの

も、誰かが日本語に翻訳しているからです。

二つ目は出版翻訳です。ビジネス翻訳と仕事のやり方はほぼ同じですが、分量が多く納期が長いことと、読者層が幅広いことが特色です。数カ月にわたる翻訳のお付き合いで著者の人柄を身近に感じられるというのは出版翻訳の醍醐味ですね。そのことが訳文にも表れます。前にも触れましたが、カーネマンやアダム・スミスはいい人だなあと感じながら訳したので、それが訳文にも反映されていると思います。『リーン・イン』の著者のサンドバーグさんはかわいい女性だなと感じました。企業のトップなのに、子育ての悩みや失敗談などの自虐ネタが出てきて、読者への気配りが随所に感じられます。それがうまく出るよう、気を使って翻訳しました。

三つ目は映像翻訳です。映画のほかにニュースやドラマなど、マルチチャンネル化で需要が増えてきました。この仕事をやりたい人は多いのですが、短納期で仕上げる必要があり、印税ではなく1本10万円等の固定報酬なので、「ブラック」と言われています。

もっとも、「ブラック」は多かれ少なかれ翻訳業界共通に言えることです。世界同時発売という企画を担当した友人の話では、本当に大変だったそうです。英語からドイツ語とかイタリア語の翻訳は比較的容易でも、英語から日本語となると時間がかかりますから。

またスティーブ・ジョブズの最後の伝記を訳した方の話ですが、機密保持がとても厳しく、データを送るのは危ないので紙の原稿がFedExで来て、外部記憶



装置へのバックアップは不可。1台のPCのみで作業

し、完成したら編集者のノートPCとケーブルでつないで渡すという念の入れようだったそうです。

私の場合は、『リーン・イン』の時に章ごとのチェックがありました。ほぼ世界同時発売だったのと、国別に多少内容を変えているのでまちがいのないように、とのことでした。もし不可だったらどうしようと重圧を感じながら提出していましたが、幸い問題はなかったです。

既に出版されている本の場合、日本の出版社は売れ行きや書評を見て翻訳する本を選びます。ですが、有名な著者が書いていて売れそうなものは、本が出る前に翻訳権の入札があります。例えば著名な経済学者のクルーグマンが書くとすると、現地のエージェントから各国のエージェントに事前通知があり、翻訳可能原稿が出たら各国のエージェントから経済系の有力出版社(日本なら日経、東洋経済、ダイヤモンドなど)に打診して入札になります。本国で出る前なので売れるかどうかはわからないし書評もない状況で、原稿をさっと読んで札入れするわけです。

もちろん例外もあります。さきほどの『ファスト&スロー』は早川書房に目利きがいて、カーネマンが書くとした段階で翻訳権を取りました。そこからなかなか完成せず5年も待たされたそうです。

またベストセラーになったピケティの『21世紀の資

本』の翻訳権は、フランスでまだ売れていない段階でみず書房が取得しました。アメリカで爆発的にヒットして他社が動いた時はもう手遅れというわけです。

話が横道に逸れましたが、こうして本の選定が終わると、担当する編集者が翻訳者を選ぶことになります。商業出版では翻訳者は選んでもらう立場で、自分から本を持ち込むことは珍しく、私自身はやったことがありません。翻訳者の場合、自分の訳書が市場に出回っているのだから、売り込みをしなくてもつねに評価されている状態にあると言えますね。

さて、では、みなさんが知りたい印税の話をしてしまおう。著者印税は定価の5-10%です。みなさんが本をお書きになったら、出版社との力関係によりますが、持ち込みの場合は5%に近く、出版社からの依頼の場合は10%に近くなります。翻訳の場合は原著者と分け合うため4-8%とすこし低くなっています。

絵本や児童書は印刷コストがかかり、画家の取り分も多いので、翻訳印税率は低いと言われます。苦勞が多いわりに収入は少ないですが、女性には人気があり、私も一度はやりたいなあと憧れています。

最初にお話したように翻訳書の著作権者は翻訳者なのですが、いろいろな意味で弱い立場です。まず定価を決められません。印刷部数も決められない上、部数を確かめることもできない。相当弱いですね。

ちなみになぜ「印税」と言うかですが、かつては奥付に検印紙を貼り、そこに著作権者がハンコを押して印刷部数を確認していました。これが印紙税の納付と似ているから、というのが通説です。

紙の本は印刷部数に対して印税をいただきますが、電子書籍はダウンロード数です。1年で24冊なんて明細が来るとちよつとがっかりします。やっぱりうれしいのは、紙の本が重版になったときですね。

### 翻訳者は何をしているか

翻訳者にとって新しい本の翻訳はいつもわくわくすることですが、では本が来たらまず何をするかというと、

印税は・・・



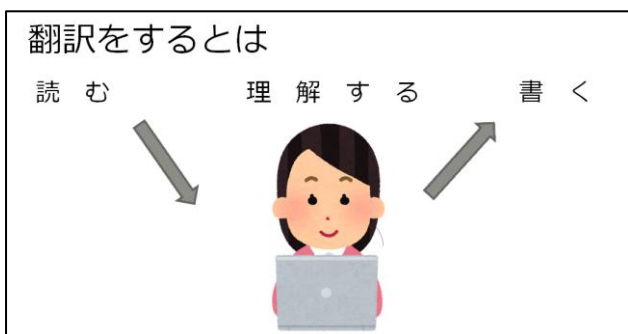
著者印税：定価 × 5-10% × 印刷部数



翻訳印税：定価 × 4-8% × 印刷部数

じつはページ数を数えます。途中で写真や図版があると、ページ数が減るので喜んだりします。翻訳は作業であって、作家のような創造の要素は少ないですから、今日は乗りがいいから 20 ページ、明日は調子が悪いから休んで昼寝というわけにはいきません。300 ページの本を急ぎで 3 か月、急ぎでなくとも 4 か月で仕上げるとなれば、1 日何ページずつ翻訳すればよいかを最初に計算して計画的にコツコツやります。

翻訳というと多くの人が英語を日本語に置き換えるというイメージをお持ちだと思いますが、実際には英文を読んで理解し、それを日本語で書くというインプットとアウトプットの作業があります。翻訳者の理解が正しくないと、当然ながら間違った翻訳になります。



この理解するプロセスで翻訳者の解釈は必ず入るわけで、読者は翻訳者の解釈を読んでいるのかと問われると、その通りと答えるしかありません。それを除きたければ原文を読んでもらうしかありません。読んで漠然と理解することは、大学まで英語を勉強した人ならそれなりにできるので、翻訳者にとって重要なのは深く理解してよい日本語で書くことだと考えています。

初めから日本語で書かれていたように書くことを心がけていますが、先日知ったのですが、実は森鷗外もそう言っていたそうです。また本は寿命が長いので、あまり斬新な表現や奇をてらった表現を使わないように、すこしオーソドックスなのがよいと思います。私の文章はあまり品がいいとは言えないけれど、勢いがあるって少し前のめりというあたりが特徴だと思っています。「文は人なり」なので仕方がないですね。

ここで、私が理想と思う翻訳文を紹介しましょう。「He was an old man who fished alone in a skiff

in the Gulf Stream ...」

「彼は老いていた。小さな船でメキシコ湾流に漕ぎ出し、独りで漁をしていた。」『老人と海』 福田恒存・訳  
「He was an old man who・・・」を「彼は老いていた。」と訳しました、翻訳はこうだなと思いました。

次は世界人権宣言の翻訳で、哲学者の鶴見俊輔さんらが審査員になって公募したものです。

「No one shall be subjected to torture or to cruel, inhuman or degrading treatment or punishment.

--Universal Declaration of Human Rights, Article 5」

「何人も、拷問または残虐な、非人道的な、もしくは屈辱的な取り扱いもしくは刑罰を受けることはない。」(公定訳)

「どんな理由があつたって、やってはいけないよ。人が人をいためつけたりひどくはづかしめたりすること。心や体を踏みにじること。」(公募訳)

硬い文章は外務省から出ている公定訳で、「罰を受けることはない」なんて意味不明ですね。「No one shall be」で shall に書き手の意志があります。公募訳では「どんな理由があつたって、やってはいけないよ」で、翻訳にはこういう可能性があるかと学びました。

では実際に、自然な日本語で翻訳するというを紹介しましょう。

これはカップヌードルの英語版解説です。3. の enjoy from cup が難問です。10 通りの答えがあつておかしくないです。皆さんいかがでしょうか



「おいしくいただきます」、楽しくていいですね。

「全部食べよう」、うーん、、、

「カップからそのままお召し上がりください」、ハイ、私もそれにしました。

From や enjoy はやさしいようで難しい。こうしたところに気を付けながら日々仕事をしています。

翻訳者は英語の辞書を引きながら日本語にしているとお考えの方が多いと思います。ですが実際には、日本語にすること以外にたくさんやることがあります。辞書を引く時間よりも調査の時間のほうが長いですね。

まず人名・地名を読むこと。東欧や北欧の言葉は簡単には読めないですし、中国語は英語読みになっているものを漢字に戻すのが大変です。出版社に問い合わせてもらったり、大使館に電話したりと涙ぐましい努力をしています。

次は商品名・会社名です。ハイテク系の本に大量に出てくる、Uber、Microsoft、Google、iPhone 等はカタカナで書くと別のものみたいになってしまい、通じないこともあります。カタカナにするか英語で残すかは最初に決めますが、変化が激しいので注意が必要です。

それから国際機関、条約、法律の正式名称も調査が必要ですね。

さらに数字も確認が必要です。欧米の人は数字が好きですが、結構間違が多いです。図表と本文の数字が違っていたり、millionとbillionが違っていたりします。

引用も要注意です。まず引用元を調べ、翻訳を探し、その翻訳が適切でない場合に初めて自分で訳します。有名な警句の引用なのに、それに気づかず訳してしまうのはとても恥ずかしいですから。

必要に応じて補足説明もします。欧米ではよく知られていることでも日本人にはなじみがないこと、例えば「スコットランドの人気バンド、アイドルワイルド」、「民泊の Airbnb」、「アーカンソー州のリトルロック」などです。逆に「日本の大阪」とはしません。国王の在位期間や大統領の任期を補うこともあります。

フランスの「プレ・オ・リ」というチキンのバターライス添えにクリームのかかった料理を「チキンライス」と訳した例がかつてありました。業界内でも語り草で、こうい

うことをしないよう気を付けないといけないです。

こんなふうに、みなさんが翻訳という言葉から想像されるのとは違うことを翻訳者は色々やっているわけです。

一方、翻訳の一環と思われるのに翻訳者がやらない仕事があります。それは本のタイトルの翻訳です。これは出版社が決めます。タイトルが販売部数を大きく左右するからでしょう。社長が決める会社もありますし、出版局長、最低でも編集長が決めます。私の訳した本の中で、原題とはかなりちがう訳になった例をご紹介します。

「Leadership」 → 「悪いヤツほど出世する」、これはよく売れました。

「The Box」 → 「コンテナ物語」、表紙は箱の絵でおしゃれなものでしたが、日本語では通じにくいだろうということで「コンテナ物語」になりました。

「How much is enough?」 → 「じゅうぶん豊かで貧しい社会」、いくら持っていれば気が済むのという原題にちょっとひねりを入れた凝ったタイトルでしたが、あまり売れませんでした。

## わかりやすく自然な日本語に翻訳する

ここで、翻訳をしていて常々感じている日本語の特徴をお話ししたいと思います。これは学問的なことではなくて、経験的に日本語はこういうものだと感じていることです。みなさんが文章を書くときにも役に立つのではないかと思うのでお話ししますね。

ひとつは語順です。英語は SVOC のように語順に厳しいしぼりがありますが、日本語は自由度が高く、それだけに工夫が大切です。

「I said that ....」

これを「私は、」で始めてしまうと、「that」の後に長い文章が来てから「・・・と言った」となり、わけがわからなくなります。日本は語順が自由なので、「・・・と私は言った」とすればよいのです。このことを「日本語作文技術」の本田勝一さんは「直結の法則」と呼んでいます。主語と述語、修飾語と被修飾語はできるだけ直結にするとわかりやすいですから試してみてください。

パーツは同じでも、語順で文のわかりやすさはずいぶんちがってきます。時事通信社の記者ハンドブックに悪文の見本として「警官は血まみれになって逃げて行く賊を追いかけた」という例が載っています。「血まみれになって」が警官にかかるのか、賊にかかるのかははっきりしませんね。

簡単なのは、読点を打つことです。

- ① 「警官は、血まみれになって逃げて行く賊を追いかけた」
- ② 「警官は血まみれになって、逃げて行く賊を追いかけた」

ですが、読点を打って解決するのは上策とは言えません。

- ① 「警官は血まみれになりながらも逃げて行く賊を追いかけた」
- ② 「血まみれになって逃げて行く賊を警官が追いかけた」

とすれば、誤解の余地はなくなります。

もう一つは、英語は名詞中心に文章を組み立てるのに対し、日本語は動詞中心ということです。たとえば英語では「He is a good runner.」と言いますが、日本語では「彼は足が速い」と言いますね。日本語の文章で無理に動詞を名詞化して使うとだいたい失敗します。

私の家の近くの公園に「犬の連れ込みは禁止です」という看板があります。「連れ込み」っておかしいでしょう？「犬を連れて入ってはいけません」のほうがいいですね。

犬つながりで、ドッグランの注意書きに「飼い主の監視のないワンちゃんの一人遊びはおやめください」というのを見かけました。犬の「一人遊び」という表現は引っかけますよね。「ワンちゃんを遊ばせるときは、飼い主は目を離さないでください(必ず飼い主が付き添ってください)」とすれば自然な日本語になります。

こんな具合に日常的に文章が気になってうるさく言うので、子供たちに嫌がられました。どんな文章でもいろいろ気になってしまうのが翻訳者の性かと思えます。

## 翻訳家は演奏家に似ている

さて最後になりましたが、翻訳者は音楽の演奏家に似ていると思っています。演奏家の場合、曲があり、それを解釈して演奏します。翻訳者も元の本があり、それを解釈して翻訳します。クラシック音楽の場合はほとんどの曲の著作権が切れているので、大勢の演奏家がそれぞれに多彩な解釈で演奏し、聴き手は自分の好みで選ぶことができます。本も、古典であればそうなります。まあ、読むのに時間がかかるのでそう何通りも読みたいという読者はいないかもしれませんが、ですが、解釈は様々で正解はなく、受け手の好みも様々だという点は共通です。

また、楽譜に完全に忠実な演奏がよいかと言えば必ずしもそうではありません。音楽性とか解釈の違いが演奏に反映されます。翻訳もそうです。

それから、曲が駄作ではいくら演奏家の腕がよくても心地よく聴けませんよね。逆にどんな名曲でも、解釈がまちがっていたり演奏が下手だったりすれば聴けたものでもなくなります。翻訳の場合も同じです。なので、名著を汚すことがないように肝に銘じ、良い本を良い日本語にして届けることが翻訳者の責任だと思っています。この機会に、みなさんが音楽会に行くときに演奏家に注目するように、本を読むときに翻訳者にもちょっと注目していただけたらうれしいです。本日はありがとうございました。

以上

### 村井さんからの翻訳に関するクイズ

折角の機会ですので訳書を皆様に差し上げようと思います。翻訳に関するクイズを出しますので、正解者に進呈します。

- ① 「No Longer Human」は、ある有名な日本の小説の英訳タイトルです。この小説とは？
- ② 「The Sound of Waves」は？
- ③ 明治時代には西洋文化がどっと流れ込んできて、新たな翻訳語が作られたり、既存の言葉の新しい組み合わせが工夫されたりしました。  
「仲間連中」はこのとき作られた言葉のひとつですが、なんとこの英語の訳語でしょうか？
- ④ 同じく明治時代に、「Liberty」という英語の訳に困って、苦し紛れにある言葉が充てられました。その言葉とは？
- ⑤ 明治時代には「be」動詞の訳語もつくられました。それは何でしょう？

### 正解

- ① 人間失格
- ② 潮騒
- ③ Society
- ④ わがまま
- ⑤ である